朝日新聞
23 三重 伊賀 13版▲ 2015年(平成27年)2月1日 日曜日

## JTBトップに郷里の先輩

# 「ユダヤ難民」取材で知る

先駆けた 国際人 いがびと伝 1 高久甚之助

私が高久甚之助さん（1886～1953）の存在を知ったのは今から30年近く前のことでした。当時、私は「国際観光振興会」（現在の独立行政法人国際観光振興機構＝JNTO、通称・日本政府観光局）という政府機関に勤めていました。その使命は、簡単に言えば海外から観光客を誘致し、外貨を稼いで国の財政に寄与しようというものでした。

そんなわけで、日本を代表する旅行会社である日本交通公社（現在のジェイティービー＝JTB）とは密接な関係がありました。ある日のこと、『日本交通公社七十年史』に目を通していたところ、同社が1940年後半から41年前半にかけて、第2次世界大戦下のヨーロッパからナチス・ドイツの迫害を逃れて日本にやってきたユダヤ難民の逃避行に一役買っていたことを知りました。その時、シベリアのウラジオストクから福井県の敦賀までの海上輸送の任に当たったのが大迫辰雄さん（1916～93）でした。

くつろいだ表情の高久甚之助の写真。『日本交通公社七十年史』に掲載された高久の肖像写真と同一とみられる＝1950年ごろ、高久紘一さん提供

大迫さんは38年に当時のジャパン・ツーリスト・ビューロー（JTBの前身）に入社し、28年後の66年に国際観光振興会に移籍されたのですが、同じ年に私が同会に就職し、その後の3年間、大迫さんの下で働いたのです。その大迫さんがそれ以前にユダヤ難民のお世話をしていたという事実を知り、非常に驚かされました。

私は中学生時代に読んだ『アンネの日記』に強い影響を受けていましたので、第2次世界大戦中のユダヤ人とJTBの関係に興味を覚えました。そして、少しずつ調査を進めていく過程で、当時、JTBのトップであった高久甚之助さんの存在が浮かび上がってきたのです。

なんと高久さんは伊賀の出身で、私の母校の県立上野高校の前身である県立第三中学校の第1回卒業生でした。そのことを知った時の驚きは、今でも忘れられません。

早速、高久さんに関する資料に当たり始めたところ、いろいろ興味深い事実に出合い、大迫さんが携わったユダヤ難民輸送の話と高久さんの人生の歩みとが重なり合い、私の関心はますます深まっていきました。

「灯台下暗し」とはよく言ったもので、郷里の先達であると同時に母校の先輩に当たる人物の存在を長年知らなかったことが大いに悔やまれました。

◇

伊賀市出身で戦前・戦中期にJTBのトップを務め、「中興の祖」と言われた高久甚之助。第一級の国際人として活躍した波乱の生涯をフリーランス・ライターの北出明さん(70)がたどります。週1回の5回連載で、次回は8日付の掲載予定です。

（北出明）

**きたで・あきら** 1944年、上野市（現伊賀市）生まれ。県立上野高、慶応大卒。国際観光振興機構に勤務し、海外はジュネーブ、ダラス、ソウルに駐在。現在はフリーランス・ライター。著書に『風雪の歌人』（講談社出版サービスセンター）、『釜山港物語』（社会評論社）、『命のビザ、遥かなる旅路』（交通新聞社）などがある。

第3種郵便物認可　2015-2-8　朝日新聞

# 旧制第三中1期生が米留学

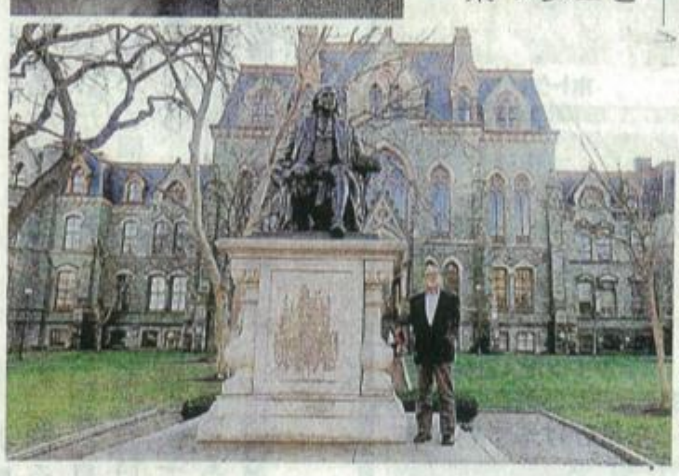
## 卒業式 英語でスピーチ

先駆けた 国際人 いがびと伝 2 高久甚之助

伊賀ゆかりの人物を多数紹介した本『伊賀の人びと』（杉生薫・今井孜編、1963〈昭和38〉年発行）をひもとくと、高久甚之助さんは次のように紹介されています。

「上野小田の出。上中、東京外語（英）を卒え直ちに鉄道省に入り大正十年欧米留学、二年後に帰朝して運輸課長となった。この間高文パス。同省退職後はジャパン・ツーリスト・ビューロー専務理事となり多数外人観光客の誘致に成功した。氏は伊賀の後輩の面倒をみ、就職その他に便を与えたので郷党の尊敬を集めた」（後略、原文はふりがな無し）

高久さんは現在の伊賀市小田町で1886（明治19）年に生まれました。三重県立第三中学校、現在の県立上野高校の第1回卒業生です。1904（明治37）年の卒業の際に優等生として表彰され、それに対して英語のスピーチを行ったという逸話があり、さらに東京外国語大を首席で卒業したといいますから、いかに英語に秀でていたかがうかがわれます。



上 欧米留学前とみられる若き高久甚之助＝1920年ごろ、高久紘一さん提供 下 2013年12月にペンシルベニア大学を訪れた筆者。銅像は大学創設者の一人、ベンジャミン・フランクリン、後方は1872年完成のカレッジ・ホールで、高久もこの建物で学んだとみられる＝米フィラデルフィア、北出明さん提供

そして鉄道省（国鉄、JRの前身）に職を得るのですが、帝国大学卒でないため省内での出世が遅れ、転職を考えます。その高久さんを、「転がる石に苔は生えない」の諺を持ち出して叱咤激励したのが、木下淑夫さんという先輩でした。

木下さんは鉄道省の草分け的存在で、12（明治45）年に創設されたJTBの生みの親となった人物です。日頃尊敬していた木下さんの言葉に発奮した高久さんは「よしっ、3年で高文（高級官僚の登竜門である高等文官試験）に受かってみせる」と宣言し、その言葉通りに合格しました。その奮励努力が、後の欧米留学へとつながったのです。

21（大正10）年7月発行の「帝国鉄道協会会報」には「高久甚之助君、鉄道事業研究の為め欧米へ留学を命ぜられ7月29日春洋丸にて出帆せられたり」との記録が残されています。高久さんは、アメリカではペンシルベニア大学のウォートン校（ビジネススクール）として世界的に有名）に学び、そこのMBA（経営学修士）を取得しています。

一昨年12月、私はフィラデルフィアにある同校を訪れましたが、90年以上も前に郷里の大先輩がここで学んでいたことに思いを馳せ、感慨無量でした。

（フリーランス・ライター　北出明）

伊賀

コーチゾン 雪の元
アレルギー性ひふ炎・やけど しっしん・虫ささされ・あせも 他
ヒドロコルチゾン酢酸エステル配合
雪の元 本店
橿原市大谷町182
☎0744-22-2440
FAX0744-22-2406

総局
14-0032
津市中央9-2
☎ 059(228)4141
Fax (224)4817
mail:mie.opi@asahi.com
賀支局
18-0842
伊賀市上野桑町2234
☎ 0595(21)3225
Fax (21)3227
張支局
18-0624
名張市桔梗が丘4-7-53
☎ 0595(65)8111
Fax (65)8112
達・配達のご用は
上野北 (23)3164
上野 (21)0206
名張 0120(62)0037
梗が丘 東部 (65)2479 西部 (63)8939
告のご用は
朝日エリア・アド 0742(24)0376
込みのご用は
朝日オリコミ大阪 0742(61)3015

# 難民移送資料 戦争で散逸

先駆けた 国際人 いがびと伝 3 高久甚之助

帰国した高久甚之助さんは、鉄道省運輸局国際課長を経て1928（昭和3）年にジャパン・ツーリスト・ビューローの第3代幹事に迎えられ、42年に退任するまでの長きにわたりJTBの基礎を築くとともに、我が国の観光産業の発展に多大の貢献をしました。

この間、前述のとおりJTBは、リトアニア領事代理だった杉原千畝が発給したビザによってナチス・ドイツの迫害を逃れたユダヤ難民の日本への移送という重大な任務を担うことになるのですが、同社の関係資料によるとその経緯は以下の通りでした。

40年春、JTBのニューヨーク事務所に現地の旅行会社から〝シベリア経由で極東に逃げてくるユダヤ難民を日本経由でアメリカまで無事に送り届けてもらいたい〟との依頼が寄せられました。東京本社では、〝それを受けるべきか否か議論が戦わされたが、人道的見地から引き受けるべしとの結論に達した〟とのことです。当時、日本と同盟国であったドイツの政策（ユダヤ人排斥）に逆らう行為を行おうとするのですから、その議論は相当激しいものであったことでしょう。

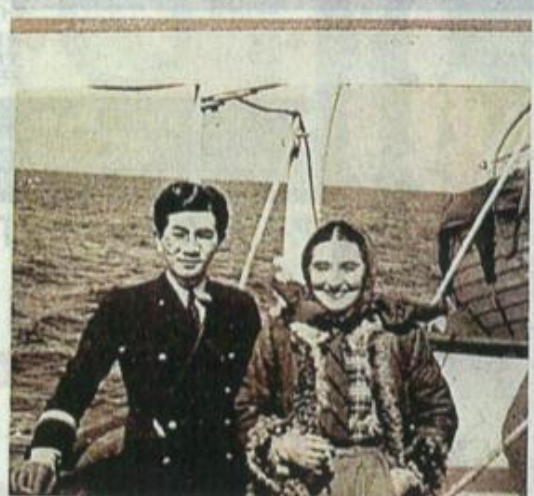
これについて私は、その背景には組織の最高責任者としての高久さんの意思が働いたのではないだろうかと推測しています。つまり、高久さんはその15年前、国際感覚を身につけて欧米留学から帰国し、誰よりも世界の情勢に明るかったはずです。特に、ペンシルベニア大学留学中にはユダヤ人学生との交遊もあり、ユダヤ民族の苦難の歴史について学んだことでしょう。日露戦争が起きたのは高久さん18歳の多感な青年期でした。その日露戦争を日本が遂行できたのは、ヤコブフというユダヤ人銀行家の金援助があったからです。高久さんは当然そのことを知っていたでしょう。

そのような推測を基に、当時の状況を検証したいとの考え、JTBの関係部署にあったのですが、戦後の混乱の中で多くの資料が失われてしまっているとのことでした。残念の極みです。

それはともかく、財団法人日本交通公社所蔵の『四十年の歩み』と題して1910年から52年までの動きをまとめた冊子がありますが、この中では高久さんの時代を「当社の最も躍進した時代であった」と位置付け、その努力と功績を最大級の賛辞で記述しています。

（フリーランス・ライター 北出

ユダヤ難民をウラジオストク（ロシア）から敦賀（福井県）まで乗せた天草丸。1944年に米潜水艦の魚雷で沈没した＝敦賀市刊「ふるさと敦賀の回想」より



ジャパン・ツーリスト・ビューロー職員として天草丸に乗り込んでいた筆者の先輩・大迫辰雄さん（左）。ユダヤ難民の女性と＝大迫さんの長女・國本美恵さん提供のアルバムから

第3種郵便物認可　2015-2-22　朝日新聞

# 図書館に世界の教科書を

## 変わらない郷土愛

先駆けた国際人 いがびと伝 4 高久甚之助

前出の『伊賀の人びと』（杉生薫・今井孜編、1963〈昭和38〉年発行）からもうかがえるように、高久甚之助さんは面倒見のいい人情家でもあったようです。

話は1920年ごろにさかのぼります。伊賀に勉強が非常によくできる一人の少女がいました。仮にKさんとしましょう。家が裕福でなく、きょうだいも多かったために上級学校に行かずに働きに出ることになっていました。しかし、周囲の人々の厚意で女学校に進むことが出来ました。

Kさんが17歳になったとき、あまりにも学業優秀なため、東京の学校に進学する話が出ました。ところが周囲からは、貧乏だから、病弱だから、結婚に差し支えるから、東京は遠い所だから、その学校へはこの女学校から初めて

上 自宅で家族が撮影した晩年の高久甚之助。上京した伊賀の人々をこんな笑顔で迎えたのだろうか＝1953年2月、東京都杉並区、高久紘一さん提供

下 「特色ある図書館」と題された高久甚之助の投稿記事＝1952年発行の「上高新聞」より

で母校の名を汚してはいけないから、などなどの反対があり、Kさんのお父さんを非常に悩ませました。

その苦悩するお父さんに「やってやりなさい」と手紙を送り、お父さんを決心させたのが高久さんでした。そのお陰でKさんは当時の女子の最高学府である東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に入学することが出来、卒業後は郷里に帰って教育委員を務めるなど、伊賀の教育の発展のために尽くしました。

そのKさんの回想によると、当時伊賀から上京した人々で、高久さんのお世話にならなかった人はいなかったとのことです。ことに、高久さんの生まれた小田出身の人たちが高久さんのお宅で〝小田会〟を持った時には、「ご免なして」から帰りの「おおきにありがと」まで、小田ことばでくつろがせてもらったそうです。

戦後になっても高久さんの郷土愛は変わらず、50年から亡くなる53年までの3年間、県立上野高校の図書館に日本交通公社（現JTB）発行の雑誌『旅』の寄贈が続けられました。また、他界される1年前、「上高新聞」に寄稿し、〝母校の図書館を特色ある図書館として天下に名をなすようなものにしたい〟との趣旨で、全世界各国の中等学校教科書の収集を提案しています。

私はこの記事を読んだとき、これは第一級の国際人の高久さんならではの素晴らしい発想だと強い感銘を受けました。高久さんの提案から60年以上が経ちましたが、このアイデアは、国境を越えた様々な対立が問題となっている今こそ実現すべきではないかと考えます。

（フリーランス・ライター　北出朋）

伊賀

国産家具
高木
橿原市八木町南部銀行横
TEL.0744-22-2372

津総局
〒514-0032
津市中央9-2
☎ 059(228)4141
fax (224)4817
mail:mie.opi@asahi.com
伊賀支局
〒518-0842
伊賀市上野桑町2234
☎ 0595(21)3225
fax (21)3227
名張支局
〒518-0624
名張市桔梗が丘4-7-53
☎ 0595(65)8111
fax (65)8112
購読・配達のご用は
上野北 (23)3164
上野 (21)0206
名張 0120(62)0037
桔梗が丘
東部 (65)2479
西部 (63)8939
広告のご用は
朝日エリア・アド 0742(24)0376
折り込みのご用は
朝日オリコミ大阪 0742(61)3015

# 占領軍トップをもてなす

先駆けた国際人 いがびと伝 5 高久甚之助

## 戒名に「観光院」

「観光院深誉博聞英賢居士」

これは1953（昭和28）年5月9日、67歳で不帰の客となった高久甚之助さんの戒名です。日本広しと言えど、戒名に「観光」の文字が使われている例はおそらくないと思います。我が国の観光事業発展のために生涯を捧げた高久さんの想いが伝わってくるようです。

高久さんは51年6月、日本観光通訳協会の会長時代、時の連合国軍最高司令官リッジウェイ大将夫妻を明治神宮に案内していますが、これが高久さんの最後の花道となったのではないでしょうか。『武士道』を著した新渡戸稲造も高久さんの英語と見識には一目置いていたと言われるくらいですから、リッジウェイ将軍もおそらく驚いたことでしょう。

高久さんが没後もいかに多くの人々から敬愛されていたかを如実に語るエピソードがあります。

68年の17回忌に「高久さんを偲ぶ会」が東京都内のホテルで盛大に開かれました。親戚ならいざ知らず、業界人の17回忌というのはきわめて稀なことではないかと思いますが、この時、当時の日本交通公社（現JTB）の西尾寿男社長は次のように述べています。

「かつて日本交通公社はJapan Tourist Bureauといわれていたが、これはJinnosuke Takaku's Bureauといってもよい」

さて、最後に高久さんの長男の虔一さん（1910～85）のことに触れておきたいと思います。

虔一さんは35年に日本郵船に入社し、シンガポール駐在を経て41年4月に横浜支店勤務となっています。この事実を知ったとき、私は「アッ！」と驚きました。41年4月といえば、杉原千畝が発給したビザで日本に逃れてきたユダヤ難民たちが、日本郵船の船に乗って横浜港からどんどんアメリカやカナダに渡って行った頃です。この時、父子の間でどんなことが話し合われたのでしょう。今となっては確かめるすべはありませんが、想像を巡らすと興味は尽きません。

その後、虔一さんは、1930年から60年まで太平洋上で活躍した、日本郵船が誇る客船「氷川丸」を観光船として残すことに尽力しました。お陰で、横浜の山下公園を訪れる観光客は、今でもその優美な姿を見ながら往時をしのぶことが出来るのです。

しかし、「氷川丸」が戦前、ナチス・ドイツの迫害を受けてヨーロッパから命からがら日本に逃げてきたユダヤの人々をアメリカに運んだという事実を知る人はほとんどいないと思います。

（フリーランス・ライター 北出明）

＝終わり

㊤リッジウェイ大将夫妻（前列中央）を明治神宮に案内した高久甚之助（左隣）＝1951年6月、東京

㊦東京・丸之内の日本郵船本社ビルで執務中の高久虔一さん＝1958年、いずれも高久紘一さん提供

伊賀

銘酒 松風

雲水亭 田原本町
本 店0744(32)2103
駅前店0744(33)2103

総局
514-0032
津市中央9-2
☎ 059(228)4141
fax (224)4817
mail:mie.opi@asahi.com
賀支局
518-0842
伊賀市上野桑町2234
☎ 0595(21)3225
fax (21)3227
張支局
518-0624
名張市桔梗が丘4-7-53
☎ 0595(65)8111
fax (65)8112
読・配達のご用は
上野北 (23)3164
上 野 (21)0206
名 張 0120(62)0037
桔梗が丘
東部 (65)2479
西部 (63)8939
告のご用は
朝日エリア・アド 0742(24)0376
り込みのご用は
朝日オリコミ大阪 0742(61)3015